

農 林 水 産 大 臣 賞

受 賞 者 とくていひ えい りかつどうほうじん 特定非営利活動法人 のうらくえん あがた農楽園
(栃 木 県 足 利 市)

【 高齢者も障がい者も若者も みんな農業で笑顔になる 】

1 むらづくりの動機と背景

足利市 あがた 県 地区で、後進に経営を譲り始めた農業者が、働く意欲はあっても機会が少ない障がい者や高齢者に気づき、「働きたいのに機会がない人、働いているのに最低賃金にも届かない人など、いろいろな人が働く喜びを感じながら交流できる場所をつくりたい」との思いから、自分達に何かできることはないか考えるようになった。

この地区に、ほ場整備の計画が持ち上がったことで、行政関係者と定期的に話し合いの場がもたれるようになり、これまで抱いていた思いについても意見交換を行った。

こうした意見交換を進めていく中で、使われなくなった農地やビニールハウスを再生し、農業を再開することで、障がい者や高齢者のための新たな就労の場を確保でき、地区の元気創出になるのではないかと考えたに至った。

関係者との打合せを継続して行った結果、この活動を持続的に行うために、特定非営利活動法人を設立することとし、法人の考え方や活動の骨格を十分に話し合い、活動内容がわかるように見える形として「あがたの未来プロジェクト」をまとめた。

次に、このプロジェクトに関する住民の合意形成を得るため、近隣住民に声をかけ、説明会を開催したところ、法人設立要件を満たす賛同が得られたため、令和2年12月に特定非営利活動法人あがた農楽園を設立した。

2 主な取組内容と成果

- 社会福祉法人（就労継続支援B型事業所）と連携し、会員が障がい者（10名）を指導しジャガイモ、サツマイモの栽培や出荷調整作業を行っている。収穫を行うほ場は地元中学生等の農業体験の場ともなっている。

障がい者には、畑の土づくりから栽培、収穫、加工・販売まで全ての作業を一緒に行うことで、一から作物を育てる楽しさや苦労だけでなく、報酬を得る喜びを実感してもらっている。

障がい者からは「自然の中での作業で、夢中になり楽しい」、施設の指導員からは「屋外の作業は心身に好影響でありがたい」との感想を頂いている。

- 障がい者に加え地域の高齢者（9名）とも連携し、スナップエンドウの栽培、販売による就労機会を創出している。

スナップエンドウは、収穫終盤に収穫量の減少や規格外品の増加などのため、社会福祉法人により、ピクルスの商品開発が行われ、新商品として販売している。

今季からは、会社を定年退職した農場長が現場を切り盛りするなど、栽培管理の充実にも努めている。

- 市から管理を受託している古墳周辺の市有地に、景観向上のためにコスモスを植栽した。地元幼稚園や周辺住民に開放したところ、地域や世代を超えた交流が促進されている。

幼稚園生からは、各自好きなコスモスの摘み取り体験を楽しんだお礼として、思い出の絵が届けられた。

花が咲く期間中の摘み取りを無料で開放したことで、SNSでも評判になり、周辺の市町からも多くの観光客が訪れ、古墳の知名度の向上にも貢献した。

- 県駅南口にある公園のイルミネーション装飾を実施し、その点灯式を自治会活動と共同で実施するなど冬の恒例行事として定着している。

令和4年度からは、規模を拡大し、市民に電球を飾る段階から楽しんでもらう「市民参加型」としたところ、成人の日には晴れ着姿の女性が記念写真を取りに来てくれる程に評判となった。

これらの活動が、足利市の田園景観の保全や新たな景観を作る取り組みとして高く評価され、令和4年度足利市建築・景観奨励賞を受賞し、会員の大きな励みとなった。

3 活動状況



法人設立総会の様子



障がい者と一緒にサツマイモ定植作業



中学生の農業体験学習



スナップエンドウの商品開発



コスモス畑での摘み取り体験



イルミネーション点灯式でのイベント

農 林 水 産 大 臣 賞

受 賞 者 うすねちいき 薄根地域ふるさと創生推進協議会 そうせいすいしんきょうぎかい
(群 馬 県 沼 田 市)

【「私たちと笑顔つなぐ里山に…」 ここに日本の原風景がある～景観と芸術による美しいむらづくり～】

1 むらづくりの動機と背景

薄根地区の棚田は、冷え固まった溶岩が点在する斜面に水田を築くため、ダイナマイトで砕いた溶岩を先人たちが積み上げて開墾した血と汗の結晶である。

しかし、少子高齢化の進行によって人口減少が進み、空き家や耕作放棄地が目立つようになり、消防団の「役員の受け手がいない」など、コミュニティ機能の低下が進むなどの生活環境の悪化が深刻になっていた。特に、薄根地区内の石墨棚田のある石墨町（西）区では、子供のいる世帯が1世帯（総世帯37世帯）となるなど、消滅集落の危機に瀕している状況であった。

こうした現状に危機感を共有した地元住民の仲間から、「地域住民に元気があるうちに地域の活性化に取り組もう」という声がきっかけとなり、平成29年から地域の活性化策について検討が始まり、棚田の再生とホタルの復活をスローガンに、地域の活性化に取り組むこととなった。

この活動をもとに、「更なる地域活性化のため、様々な団体や個人の力を結集しよう」ということになり、平成30年12月に「薄根地域ふるさと創生推進協議会」を設立し、本格的な活動がスタートした。

2 主な取組内容と成果

- 棚田オーナー制度には、県外からの多数の参加者も含め延べ59組の参加を得ており、また令和5年度からは法人オーナーが誕生するなどオーナーも多様化し、農作業を通して参加者同士や地元住民の交流の場にもなっている。

味噌づくり体験も年々参加者が増え、延べ57組が参加するなど人気のプログラムになっている。参加者からは「家族のために作りたい」、「子どもと一緒に体験してみたい」などの声もあり、地元産の材料にこだわっているところも大きな魅力となっている。

こうした様々な農業体験を通じ地域住民との交流を図り、農村地域の伝統的な食文化の継承につながっている。

- 集落内の水路を整備し、ホタルの生息環境の保全・維持を行うほか、地域の小学校にカワナノ養殖を依頼するなど自然体験学習の機会を提供し、学童教育にも貢献している。

参加した小学生が書いた「カワナノ日記」では、「キャベツよりもレタスの方をよく食べる」など興味を持って取り組んでくれたことが伺え、生態系の保全だけでなく地域の子どもたちに自然に触れる機会や学びの場を提供することができている。

- 石墨棚田の良好な景観を復活させ、ホタル祭り及び棚田イルミネーションを開催することができ、それぞれ市内外から約500名の来訪者があり、地域住民との交流促進が図られている。

カワナノの放流を始めた翌年度からホタルが飛ぶようになり、その数も年々増加している。

棚田イルミネーションは、群馬県内で初めて「つなぐ棚田遺産」に認定されたことを記念して開催され、地元の小学生や高校生、ボランティアなど薄根地区全体で連携しながら準備を進めた。

来場者からは、「沼田で初めての棚田のイルミネーションだ」と感動の声や、地元FM局のFM尾瀬「FM・OZ Eハートウォーミング大賞」を受賞するなど多くの称賛を得ている。

- 棚田の整備には、ジャングルのような耕作放棄地を地元の有志とともに重機を使って整備をするなど相当な苦労があり、棚田の再生はまさに努力の賜物であり、今後も棚田を活用した様々な取組が継続・拡充されることが期待される。

3 活動状況



協議会メンバー



ジャングルのような荒地から始まった棚田の再生



棚田オーナーによる田植え



毎年人気の味噌づくり体験



小学生によるカワニナの放流



大盛況のホタル祭り

農 林 水 産 大 臣 賞

受 賞 者 あら いじゆくえき 新井宿駅 ちいき と地域まちづくり協議会 きょうぎかい
(埼 玉 県 川 口 市)

【 花とみどりとあたたかい人たちがいるまち 】

1 むらづくりの動機と背景

神根地区は都市計画法上の市街化調整区域が多く、伝統産業である植木の産地であるため、東京近郊でありながら緑地帯も多く、歴史的な資源が豊富にあることが特徴である。

一方、重要な交通拠点でもあり、東北自動車道、東京外環自動車道、首都高速川口線が通っており、平成 13 年に埼玉高速鉄道の「新井宿駅」が開業してからは宅地化が進み、街並みは大きく変化した。

また、近年農家の高齢化や後継者不在によって耕作放棄地が増えるとともに、農地が資材置場等に転用され始めるなど、地域の環境が大きく変化していく中、古くから鋳物や植木の町として知られる地域でありながら、こうした文化や歴史がこのまま埋もれてしまっているのだらうかとの問題意識が生まれた。

このような問題意識は農家に限らず地域に住む住民の共通認識になり、「都市型農業の魅力」と「確かな暮らし」を結ぶまちづくりをテーマに、立場を問わず志を同じくするメンバーが集まり活発な意見交換を重ね、「地域の魅力を発掘し、未来の地域のために役立てたい」との基本方針を掲げ、平成 23 年 3 月に「新井宿駅と地域まちづくり協議会」を設立した。

平成 27 年から協議会に、「都市農家部会」、「歴史部会」、「文化・工芸部会」、「プロジェクト部会」、「地域事業部会」を設置し、それぞれ活動を行っている。

2 主な取組内容と成果

- 収穫祭・地域の文化的コミュニティの発表の場と位置付けている「イイナフェスタ」は協議会発足時から継続して開催し、地元かみね野菜などの販売（約 300 万円）を行っている。

また、都市農家部会のメンバーは地元スーパーに地場野菜コーナーを設置し、地元野菜を供給することにより年間約 580 万円の売上があるとともに、収穫情報を SNS で毎日発信するなど積極的に地元野菜を PR している。

- 春キャベツ、じゃがいもなどの収穫体験（約 600 名参加）の開催、会員農家がオープンしたダリア園では、摘取体験や生け花教室も開催するなど地域住民との交流の場となっている。

いずれも住宅の近隣に畑があり、近所で収穫体験ができる魅力的なイベントとなっている。

地域の魅力発信の場として、古民家カフェの応援と協力を行っており、ランチの食材には会員の野菜などを提供している。

- 江戸中期より地域の特産品であった「赤山渋の復元プロジェクト」として赤山の柿渋を復元し、染物や工芸品の工作に加え、「地域の文化を伝える」と題して近隣の小学生に赤山渋染めの体験活動を行っている。

和紙のハガキに「赤山渋」を塗る講習に参加した小学生は、渋柿染液の匂いに驚きの声をあげながらも面白いほど染まっていく様子に興味を持ち、和紙のハガキに楽しそうに絵を描くなど、体験を契機として地域の方々との繋がりが深まっている。

- 市内の食品加工業者・飲食店等と協同して、地域特産の生姜を使った神根生姜ウインナー等の 6 次産業化品（27 品）を開発し、イベントなどで販売しており、神根生姜ウインナーや地場産夏みかんなどの果物を使ったジャムは川口ハイウェイオアシス売店で人気商品となっている。

学校給食では使用の難しいいちごについて、川口産 100%使用のいちごゼリーとして会員のいちご農家が開発し、市の給食メニューとしていちごゼリー（いちご 250 kg）や神根生姜ウインナー（1,125 kg）等を提供している。

地元農産物を使った 6 次化産品は、今まで地元の原材料を使ったご当地産品が少なかった川口市において開発をリードしており、市内の食品加工業者や飲食業者の注目を集めている。

3 活動状況



協議会メンバー



ミニフェスタ出店地元の農産物が並ぶ



地元スーパーの地場産野菜コーナー



じゃがいも収穫体験（都市農家部）



赤山漬作り（文化工芸部）



関 東 農 政 局 長 賞

受 賞 者 ^{みち えき}道の駅^{せいさんしゃくみあい}つる生産者組合
(山 梨 県 都 留 市)

【 道の駅を核とした地域活性化 】

1 むらづくりの動機と背景

都留市は中山間地域のため、生産性の低い傾斜地や小規模な農地が分散して点在し、耕作放棄地の増加に加え、農家の多くが兼業農家で、農産物を販売するという意識に乏しく、親せき等への「おすそ分け的な文化」が根付いていた。

一方、販売農家からは農産物を積極的に販売したい、消費者からは地元産の農産物を購入したいという要望があるものの、地元農産物を販売・購入する方法が確立されていなかった。

このような状況を打開するため、農家の販路拡充、農業所得及び営農意欲の向上を図る仕組みづくり、市を訪れる観光客の受け入れと他の観光施設等への波及など地域経済発展の起爆剤となる施設整備が必要という合意形成が図られ、農林産物直売所の建設事業がスタートした。

しかしながら、直売所運営で最も重要なことは「品揃え対策」であるものの、農産物を安定出荷できる組織が存在していなかったことから、平成 26 年度から、農家向けの視察研修や農業技術向上のための講習会等の開催と併せて、生産者組合設立に係る準備委員会を立ち上げ、組織の形態、活動内容、出荷販売のためのルールづくり等に係る議論を進めた。

こうした経過を経て、「組合規約」、「組合出荷・販売要領」を取りまとめ、平成 28 年 5 月に「道の駅つる生産者組合」を設立し、本組合には、「野菜・果樹部会」、「加工部会」、「穀物部会」、「手工芸部会」の 4 部会が設置され、各部会が特色ある活動を展開している。

2 主な取組内容と成果

- 組合員によって生産される葉物野菜、スイートコーン、ニンニクなどに加え、「平成の名水百選」にも選ばれている良質な地下水を用いて伝統的な手法で栽培される水かけ菜は市の特産であり、道の駅での購入者は「新鮮な野菜も買えたので夕飯を作るのも楽しみ」と話すなど大変人気の商品となっている。

併設の飲食提供施設では、かぼちゃ等を原材料としたジェラートも人気商品となるなど地産地消にも貢献しており、こうした取組等により、組合員数は 5 年間で 40 名増加している。

子どもたちにも愛される道の駅となることを目指して、市内の幼稚園等の児童を対象に、生産される農作物を自ら収穫し、味わってもらふ「つる野菜収穫イベント」を開催しており、子供たちからは「葉っぱがきれいでおいしかった」、「むかしのひとつで大変だったんだね」等の声があり、市民との交流も積極的に図っている。

- 県営中山間地域総合整備事業により農業基盤整備を総合的に進めるとともに、県独自の農地の条件整備を行う「機構借受農地整備事業」により、組合員の営農規模の拡大や耕作放棄地の解消、増加防止に努めている。（3 年間で農地の条件整備により営農再開された農地約 2.5ha）
農業所得の向上と新たな特産品づくりを目指して、「高収益作物導入事業」を導入により、道の駅の近接地に「試験ほ場」を設置し、日常の肥培管理等は地域おこし協力隊員の力を活用することで、市の気候風土でも果樹栽培が可能であることが実証された。

- ブランド豚を生産する唯一の養豚農家の後継者問題や新たな特産品確保のため、地域おこし協力隊の力を活用し、事業継承の解決やブドウやモモ等の生産体制を確立することにより、3 年間でブドウ・モモの作付面積が約 3 ha 増加している。

地域おこし協力隊員は、「果樹栽培は子供の成長を見ているようで感動した」と振り返り、任期終了後は果樹専業農家として市内に定住し、組合員として道の駅に出品するほか、生産した果樹は、ふるさと納税の返礼品としても活用されている。

- 市内のお寺を会場として栄養面に配慮した食事を提供している「つる食堂（子ども食堂）」に食材提供で協力することで、食品ロス削減や子どもの貧困対策等に貢献している。
この活動は市内の大学に通う学生の「地域の子どものための居場所づくりに関わりたい」という思いから創設されたボランティアサークルが中心となって実施しており、地域の方々とも協力しながら、食を通じた地域コミュニティの活性化に繋がっている。

3 活動状況



生産者組合設立総会の様子



「道の駅つる」の施設内観



野菜部会による「夏の収穫祭」



つる野菜収穫イベント



新たな特産品として出荷を始めたブドウ



つる食堂（子ども食堂）